

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日
令和元年十月一日発
百特別換承認誌第六二七号
百二十二巻第十号

ホトトギス

十月号



風雅の小筈〔二十一〕

廣太郎

このコーナー〔五〕で、俳句は紙と鉛筆があれば出来る、という話から色々申し上げた事を覚えておられる方は多いだろう。今回はべつにその事と直接関係あるというわけではないが、私がホトトギス社に入社し、本格的に俳句を志すようになった昭和五十七年頃、勿論紙と鉛筆は必需品であったが、思い出してみると、その頃まだ現在販売されているホトトギスの句帖は無く、何かメモ帳だったか、小さいノートに句を書いていたように記憶しているが、何故かその現物は現在紛失してしまつて、具体的にどのような物かははっきり覚えていない。しかし、その当時の句は『廣太郎句集』に何句か収められているのは少し不思議な気もする。

話が脱線したが、その句帳の他には、やはり大切な書物としては、もう皆様お気付きだろう、その歳時記である。ただ、こちらも昭和五十七年当時、現在ホトトギス誌友であればほぼ全員お使いだと思われる、汀子編『ホトトギス新歳時記』は未だ出版されてはいなかったのである。聞いた話では、この歳時記も出版は、ホトトギスが一千号を迎えた昭和五十五年、その記念として出版される企画であったそうだ。もしそうなら、私がホトトギス社に入社した時にはその歳時記を使用していただろうが、当時は虚子編『新歳時記』であった。そして歳時記と併せて大切な書物の必要性も強く感じるようになるのである。実は今回はこれが本題であったのだが、脱線のし過ぎで、ここまで話が及ばなくなり申し訳無いが、汀子編出版の裏話という事で、続きは来月のお楽しみとさせて頂く。

句日記 汀子

平成三十年十月一日 ロイヤル吟行会

台風はすみやかに廻されし旅二日
決断はすみやかに廻す台風裡
台風風の昨日は遠し旅心

十月六日 芦屋ホトトギス会

風音の中より届く秋の声
会合を済ませし安堵小鳥来る
新酒とて禁酒の我に遠慮なく
又次の台風一喜一憂す

十月七日 下萌句会

木屋の所在問はずも自づから
声落したるより渡り鳥となる

十月九日 大阪倶楽部

秋惜む心に今日をふり返る
渡り鳥空の広さを知り尽くし
定まらぬ陽気やや寒心地よし
一步又一歩金木屋の香に
やや寒に辿りつきたる思ひかな
誘はれていつしか金木屋の香に
木屋の庭を抜け来し人ばかり

十月九日 綿業倶楽部

初紅葉には突然といふ旅路
初紅葉少し遅れるてふ便り
新酒とや虚子命名の酒所
み吉野の消息問はん初紅葉

十月十一日 清交社

風荒き日もやうやくに秋の暮
表情のなきが表情なる案山子
蔓引けば隠れてしまひ鳥瓜
一日は二十四時間秋の暮
俯きて案山子に目鼻なかりけり
知られたる怪我也癒えたる秋の暮

歳月に追はるることも秋の暮
十月十二日 工業倶楽部

秋惜む仕事のを置きざりに
秋惜む旅とて仕事ばかりかな
十月十四日 西の虚子忌

ここも崖崩れの跡やそぞろ寒
薄紅葉山路いざなふ心あり
秋冷の心地よかりし一忌日

十月十五日 朝日カルチャー

忌を修し終へ心足る秋の暮
昨日より続く秋晴又明日へ
昨日会ひ今日又会ふも爽やかに

十月十六日 有恒俳句会

この日和やうやく秋と言へさうに
華やぎは桜紅葉といふ人も
肌寒きことに気づきし外出かな

紅葉して華やぎを又取り戻す
肌寒きこと心地よき快晴に
台風季節やうやく過ぎしとも

十月十六日 無名会

順調に仕事を崩し秋惜む
小鳥来よ風雨に荒れし庭なれど
忌を修し終へたるよりの秋惜む
肩の荷を降ろす如くに秋惜む
秋惜む心抱きて逢ふ友も

十月十七日 夏潮句会

濁酒禁酒まだ続きをり
団栗を踏み音ある山路かな
消息に安堵の電話秋深し
秋深しやうやく晴の日のつつく
配らるる西の虚子忌のお供物も
秋の日の陰り易きもそれらしく
庭師来て団栗一つ残さずに

十月十八日 クラブ合同俳句会

水音を羽音に小鳥来たる庭
歳月をとどむ術なし小鳥来る
拾ひたる木の実何時までポケットに
十月十九日 アネモネ句会

秋惜みつつ今日も又旅にあり
快方に向かひしと聞く秋深し
灯点して一人の時間うそ寒し
母上を悼みし秋の深かりし
十月二十五日 きさらぎ句会

体調に不安もありて秋深し
上京の朝の期待の野菊晴
誰彼に逢へる野山の錦かな
今日も又野菊に晴れし旅心
冬近き旅に体調ととのへて

十月二十五日 時雨句会

掃き集め残る木の実を拾ひけり
早々と引ききたる風邪を持ち歩く
よく晴れてあてそぞろ寒なりしか
二三日予定混み合ひそぞろ寒
十月二十六日 年尾忌

体調をととのへ参ず年尾の忌
何としてでも来たかりし年尾の忌
十月二十七日 句会と講演の会

こだはりを捨てたるよりの冬支度
皆歳を取りしと語り秋惜む
又逢へて時代流れをりしこと
案山子にも語れば尽きぬ旅の秋
十月二十九日 摩耶山俳句大会

山紅葉早し遅しと言ふも摩耶
台風の残してゆきし山路来し
薪割りの音に近づく山の冬

廣太郎旬帳

廣太郎

平成二十年十月四日 蕉心会

澄む水に溶かしてしまひたき一事
うそ寒やケルンめく橋工事中
颯風に真向ふ西の旅間近
さあ皆さん西の虚子忌に行きませう
我肥ゆるわけにはゆかず馬肥ゆる
雨に色移し薄々紅葉かな
あれ門が無い芭蕉館そぞろ寒

十月五日 カトリック新聞選者吟

初紅葉濡れ色といふ輝きに
十月五日「円虹」新年号色紙
去年今年四半世紀といふ節目

十月五日 上田悦子様句集序句

春風となり句心を遺されし

十月六日 菅屋ホトギス会

忌心を乗せて横川に小鳥来る
水澄むや水禍の記憶鎮めつつ
新酒の香纏ふ忌日の虚子之塔
秋の声 関西弁で聞く故郷

十月七日 野分益屋例会

きりたんぽ秋田美人の酌に酔ひ
みちのくに夜気の迫りてきりたんぽ
みちのくの君の傍りたんぽ
血統書付シヤム猫に草風
草じらみ付けて二人は何処に居た

十月七日 青嵐益屋例会

檸檬の香君の唇近ければ
電線に来ては零れて目白押
風に聞く季節の便り目白来る
檸檬添へビーフステーキ焼き上がる

十月十一日 土筆会

横川の忌間近にしたる秋の声
終電の尾灯目で追ふ夜寒かな
林檎挽ぐみちのくの風匂はせて
秋の声 芝生に沈む命より
タワ一の秀夜寒の星を誘へる

十月十四日 西の虚子忌

峰寺を膨らませたる秋の声
十年を露らまく語る忌日寺
十月十五日 朝日カルチャー若草句会

鹿垣を守り続けて白寿かな

静かなる闘志運動会前夜
栗剥いて厨に季節呼び込める
君と手を繋ぎたいから運動会
毬栗の落ちて山気の深まりぬ

十月十六日 むさし野吟行会

朝寒を払ひホ社より六千歩
平成を惜む皇居の初黄葉
小鳥来る吉田茂の視線かな
一步入るより街騒は秋声に

十月十七日 北國文芸選者吟

虫の音を俯瞰してゐる鳥語かな
十月十八日 登高会

うそ寒や又もハンドル握る母
戦国の城が動いて衰れ蓮
うそ寒くの口が動いて衰りにけり
十月二十一日 岡山稲畑廣太郎と学ぶ会

出来秋と富士を車窓に嵌め西へ

吉備の空雲払ひつつ小鳥来る
爽やかに南朝を守る家系かな
大岩といふ露の世の御神体
頼寄せる君匂やかに爽やかに

十月二十三日 若水句会

みちのくへ中稲眩しき車窓かな
敗荷に風の尖つてゆきにけり
中稲てふ日本の主張ありにけり
駅頭の風を色付け赤い羽根
越の風中稲の味を仕上げゆく

十月二十四日 目黒学園句会

千仞といふ明るさに紅葉谷
下町の鐘の音重し菊供養
永観堂紅葉に明けてゆく仔細
蜜柑剥き十年前の話など

十月二十六日 年尾忌

鎌倉の蒼天 拵げゆく添水
阪神の最下位も告げ年尾の忌

十月二十七日 ホトギス社句会

忌心を納めてよりの冬支度
早世の父の遺品も冬支度
目鼻描くより魂宿る案山子かな
夜は星の使者ともなりて捨案山子

十月二十八日 青嵐会東京例会

秋天を指揮する如きタワ一の秀
公園の芝生の色に秋惜む
野良猫の視野を掠めて小鳥来る
大豊滑り落つ風冬近し

十月二十八日 野分会東京例会

縁談を断り続け草じらみ
きりたんぽ窓打つ風も味の内
計画は二転三転草じらみ
十月三十一日 徳源寺句会

秋日濃し尾張の空を画布として
帰りに花徳川園の要として

雑詠 廣太郎 選

雲海や西を端緒に大八洲 東京 田丸千種
 仁王像足下に潜む黴の冷え 同
 役者より幟の多き夏芝居 同
 ふるさとの風の味して新茶かな 龍ヶ崎 今橋眞理子
 風音を集めて一樹夏に入る 同
 夏に入る丸ビル囲む木蔭より 同
 人寄れば鯉の押し合ふ薄暑かな 神戸 立村霜衣
 かつて川なる道広く夏霞 同
 代々の桶屋栄えて風薫る 同
 五月闇神の山にも風禍あり 京都 山崎貴子
 襖絵の墨絵剥落五月闇 同
 園丁の一人に一つづつ蚊遣 同
 浮世絵の女三相古団扇 神戸 和田華凜
 単衣着てゆきたきところ思川 同
 蛭袋人に知られてならぬこと 同
 ときに波人魚に見ゆる夜釣かな 同 藤井啓子
 声だけはハンサムなりし夜釣人 同
 鈴蘭や馬と話せるアイヌの娘 同

城下町大動脈の淀涼し 奈良 古賀しぐれ
 開門てふ水の力学淀涼し 同
 船遊淀の開門通りやんせ 同
 歩み出す北の大地の新樹道 長岡 安原 葉
 夏霧のはれていきなり着陸す 同
 香も刻む大花時計風薫る 同
 父さんのセルが二着の子供服 神戸 山田佳乃
 飛魚の風に乾いてゆくつばさ 同
 金の蕊残して牡丹散華かな 同
 拓けゆく地上に待つてゐるビール 東京 阪西敦子
 酔ひすこし残りぬセルをしやんと着て 同
 セルの人果たして麻布十番へ 同
 溝浚へして水音の軽くなり 神戸 涌羅由美
 花街の朝のしづけさ立葵 同
 失恋の指先つまむさくらんぼ 同
 母の日や母の形見に風通し 東京 山田閨子
 朝より夏炉絶やさず峡の雨 同
 新緑の候より令和はじまれる 同
 花千本積み上げて一山となす 袋井 湖東紀子
 輝きは静けさとなり夜の桜 同
 幹にあり枝垂桜の歳月は 同
 さみだるる三年坂の夕まぐれ 東京 橋本くに彦
 さみだれや女ひとりの京の旅 同
 東山西山京のさみだるる 同

雑詠句評（九月号より）

甘櫿の丘を喜び石鹼玉 神戸 後藤比奈夫

「石鹼玉」江戸初期に無患子の実の皮を溶かし、麦蘖や葎の茎を用い遊んだのが始まりのようである。明治以降石鹼が主流となり、今ではビニールのストローが使われている。五色の泡の玉の変化が陽光に相応しく春の季節となっている。

掲句の「甘櫿の丘」は、奈良県明日香村にあり、允恭天皇が探湯（くかたち）を行った地、曾我蝦夷、蘇我入鹿親子所縁の地のようであるが、歴史に疎い私にはそれ以上の事は判らない。従って「甘櫿の丘」と「石鹼玉」を結ぶ、「喜び」の意味も「祝い事」を言っているのか「うれしい」ことを伝えているのかも判断が出来ない。「甘櫿の丘」と「石鹼玉」にどの様な因果関係があるのか見つけられない。私には推理不能の句に戸惑っている。主宰の解釈に学ぶ事としたい。（青天子）

歴史的にも有名な奈良県明日香村の甘櫿の丘である。そこを訪れた一家だろうか、その丘で石鹼玉を吹いているのである。標高百四十八メートルの緩やかな丘で、明日香村が一望出来、石鹼

玉もよく飛んだのだろう。その石鹼玉自体が喜んでいっている表現が季節の明るい姿を現している。（廣太郎）

よく食べてよく寝て花を見て吉野 長岡 安原 葉

いかにも吉野の花に心はずむ一句。この句のポイントは、よく「食べて」「寝て」「見て」と力強い動詞に「て」をリズムカルに重ねて、最後に「吉野」と一気に花の吉野の景色を見せる手法。満開の花に包まれている満足を軽やかに身体全体で自由に表現したところに感服。花の旅の躍動感あふれる、まことに天真爛漫な一句。花鳥諷詠の極楽の自在の境に遊ぶ作者である。（中正）

普段は忙しくて、あまりゆっくりと食事をする事や、睡眠をとる事が出来ない作者である。そんな中、年に一度吉野山で文字通り「吉野くつろぎの旅」という稲畑汀子主催の花の旅では美味しい料理を堪能し、美しい桜を愛でる。贅沢な日本ならではの風景が見て取れる。（廣太郎）

天地有情

咲きみちし吉野の花に癒されて
 長岡 安原 葉
 春眠や車窓の富士は疾うに過ぎ
 同
 一隻は俳諧舟や初桜
 福山 竹下陶子
 同
 暖かや象の結核治りたる
 同
 湯ざめして母の大事を聞く電話
 東京 稲畑廣太郎
 同
 恙身の母には湯ざめ許されず
 同
 蘇枋にも敷いてやりたき花筵
 神戸 後藤比奈夫
 同
 生けられて蘇枋は紅を失はず
 同
 万緑の海より湧いてくる祈り
 熊本 岩岡中正
 同
 枇杷熟れてより望郷の空となる
 同
 妻の魂甦りしか復活祭
 東京 河野昭彦
 同
 吾が妻も永遠の安息復活祭
 同
 老といふ一字封印して涼し
 同 山田閨子
 同
 知つてみて知らざる虚子よ露涼し
 同
 母の日の妻へワインを選びけり
 神戸 三村純也
 同
 崩れつつ雪形残る桐の花
 同
 人間が翼の欲しくなる五月
 東京 大久保白村
 同
 右城さん偲ぶや栗の花の香に
 同

虚子選

虚子逝くと泣きし日のこと花吹雪
 同 今井千鶴子
 国賓のあり東京の空涼し
 同
 桜餅いまは仏の妻に買ふ
 相模原 木村享史
 同
 老虚子と青年我と桜餅
 同
 橡咲けば美穂女忌近くなつかしく
 神戸 千原叡子
 同
 健康の戻る予感や更衣
 同
 用のなき日の雨は好き桜餅
 龍ヶ崎 今橋眞理子
 同
 届きたる新茶をすぐに淹れてみる
 同
 信州を遥々越えて鳥帰る
 吹田 大橋 暁
 同
 仁徳帝徳の高きを偲ぶ春
 同
 ねぎらひの言葉庭師へ薔薇の園
 宝塚 水田むつみ
 同
 薔薇一花一花綺羅おく雨上り
 同
 日が差して時にやさしき卯浪かな
 神戸 浜崎素粒子
 同
 朴の花あれよと教へられずとも
 同
 炎天の浅間の土になるべかり
 群馬 中杉隆世
 同
 孤独なる夏炬となつてをりにけり
 同
 朴の咲く一本の庭深山めく
 西宮 本郷桂子
 同
 丹精の時間奪はれ根切虫
 同